

デジタル文学地図の研究への活用 - 『雨月物語』 を例に -

飯倉 洋一 (大阪)

Abstract

The Digital Literary Map of Japan was developed as an international research project between Heidelberg University, the National Institute of Japanese Literature and Ōsaka University. As a case study of how the digital literary map can be used for research, this paper describes the use of poetic places (*utamakura*) in Ueda Akinari's 上田秋成 *Ugetsu monogatari* 雨月物語.

1 デジタル文学地図とは何か

デジタル文学地図は、ハイデルベルク大学で発案企画され、その後、国文学研究資料館・大阪大学との国際共同研究に展開し、現在も継続している¹。

まず、デジタル文学地図の構成と目的について述べる。下図のように、①日本地図に歌枕をマッピングした歌枕分布地図を見ることができる。



¹ 2021-2025 年度科研基盤研究 (B) 「デジタル文学地図の構築と日本古典文学研究・古典教育への展開」 (研究代表者 飯倉洋一)。

歌枕は、2022年2月現在71件が登録され、地図上にマッピングされている。この歌枕地図で、和歌・謡曲・有名文学作品（伊勢物語・源氏物語・平家物語など）に出現する頻度の高い歌枕の分布や、歌枕相互の距離感を可視化することができる。また、紀行文における歌枕探訪の行程を可視化することも可能である。

第二に、②歌枕の「基本情報」としてその概要を表示することができる。「基本情報」では、歌枕の意味・特徴・連想が説明される。

たとえば、「吉野」を検索すると、「歌枕の意味」に「吉野山、吉野川、吉野里、吉野滝、吉野岑、吉野宮、吉野高根、吉野尾上、吉野花園」と出てくる。「吉野」という語が具体的に示す内容が「歌枕の意味」である。

「歌枕の特徴」には、「聖地、隠棲の地、桜の名所」と「吉野」の持つ独自の特徴が記される。その地の風物、著名な歴史的事実や古典の記述に基づいて形成される、その地のイメージということができる。

「連想（歌枕として何を呼び起こしているか）」として「法師、金峯仙、御幸、岸の山吹、春かすみ、唐土、峯の白雲、雪、桜、常盤、大海人皇子、大塔宮」が掲載されている。「連想」とは歌枕が呼び起こすイメージや掛詞である。ここでは俳諧の付合語辞典である『俳諧類船集』を主要な資料とし、『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、2014年）を参考にしている。『類船集』の付合語は連歌の付合語をも踏まえていると考えられるため、連歌付合書を踏まえていないという批判は適当ではない。

また、③「地誌・歴史」の項目があり、地名の基礎的知識を確認できる。吉野の場合であれば、「地誌」の説明に、

大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡一帯を指す。吉野山と吉野川が名高い。吉野山は現在の吉野山のみならず金峯山・水分山・高城山・青根が峰など広範囲にわたる総称であったという。吉野川は大台ヶ原に発して、宮滝・上市・下市・五条市を流れ、紀伊国屋（和歌山県）に入ってから紀ノ川と称される。

とあり、「歴史」には、

7世紀には吉野川流域の宮滝付近に離宮が営まれた。壬申の乱に際して大海人皇子（天武天皇）がここを拠点としたこともあって、天武天皇の妻・持統天皇の御代以降聖地として顧みられ、しばしば行幸が行われた。平安時代に入ると万葉時代とは異なり、吉野山も盛んに詠まれるようになる。「み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れ家にせむ」（古今集・雑下・九五〇・よみ人しらず）のように、吉野山は人も通わぬ隠棲の地のイメージを持つことになる。くわえて吉野山が雪深い地として詠まれるようになるのも、平安時代以降であった。「朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」（古今集・冬・三三二・是則）の名歌をはじめ、『古今集』以後は吉野山と雪の組み合わせが常套となった。

万葉時代には吉野山よりも吉野川のほうが、圧倒的に多く和歌に詠まれた。吉野川の例としては、柿本人麻呂が行幸従駕の際に詠んだ「見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む」（万葉集・巻一・三七）が有名だが、この歌は吉野の「聖地」としてのイメージが、流れの絶えない川の清浄さによって象徴されている。

さらに ④歌枕の用例を通覧することができる。カノンの古典テキスト、すなわち『古今和歌集』から『新古今和歌集』に続く、八代集と呼ばれる勅撰和歌集、『伊勢物語』、『源氏物語』、『平家物語』、主要な謡曲テキスト、『奥の細道』らの用例が一覧できるが、現時点では、構築中であるため、精粗がある。ちなみに吉野の用例の一部を上げてみよう。

ID (国歌大観番号)	詞書	テキスト	キーワード
古今 (124)	よしの河のほとりに、やまふきのさけりけるをよめる	よしの川 / 岸の山吹 / ふく風に / そのかけさへ / うつるひにけり	よしのがわ
古今 (471)	題知らず	よしの川 / いはなみたかく / 行水の / はやくそ人を / 思ひそめてし	よしのがわ
古今 (492)	題知らず	吉野川 / いはきりとをし / 行水の / 音にはたてし / 恋はしぬとも	よしのがわ
古今 (651)	題知らず	芳野河 / 水の心は / はやくとも / たきの音には / たてしとそ思	よしのがわ
古今 (673)	題知らず	逢事は / 玉のはかり / 名のたつは / 吉野の川の / たきつせのこと	よしのがわ
古今 (699)	題知らず	みよしの / おほかは野への / 藤なみの / なみに思は / わかひめやは	よしのがわ
古今 (794)	題知らず	よしのかは / よしや人こそ / つらからめ / はやくいひてし / ことは忘れし	よしのがわ
古今 (828)	題知らず	なかれては / 妹背の山の / なかにおつる / よしの川の / よしや世中	よしのがわ
仮名序		よしのかはをひきて世中をうらみきつるに今は	よしのがわ
古今 (332)	やまとのくににまかれりける時に、ゆきのふりけるをみてよめる	朝ほらけ / 有明の月と / 見るまてに / 吉野の里に / ふれる白雪	よしののさと

81件中1-10件目

<< < 1 2 3 4 5 6 7 8 9 > >>

←戻る

Copyright ©2015-2022 Judit Árokay - Page by Leo Born

なお、この用例は著作権・所有権の問題をクリアするために、国文学研究資料館が公開しているオープンデータセットの古典籍を底本として採録し、それを翻字している。

古今 (124) ×

作品: 古今和歌集

巻・部立: 巻第二・春歌下

詞書: よしの河のほとりに、やまふきのさけりけるをよめる

テキスト: よしの川 / 岸の山吹 / ふく風に / そのかけさへ / うつるひにけり テキスト (ローマ字) を表示

キーワード: よしのがわ

著者: 紀貫之

著者 (ローマ字): Ki no Tsurayuki

URL ⓘ : <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200007093/viewer/29>

UV

Image 29 of 166 Go

CONTENTS << 古今和歌集 >> MORE INFORMATION

30

29

研究・教育に関わる者にとっては、この用例データベースは、様々な使い方が出来ると思われる。ただし、研究論文にテキストを直接引用すべきではない。引用する際は、原典を確認していただけるように、原典へのリンクを張っている。

本データベースは、研究者に対しては、あくまで目安としての利用を想定している。教育現場で利用するには、直接利用していただいて問題ないと思う。

また、⑤歌枕のイメージ画像（名所絵）を見る事が出来る。これはまだシステムの中に取り込んでいないが、画像情報は着々と集めている。今後公的機関が公開しているリンクフリーの画像にリンクを張り、名所のイメージ形成を考えるヒントにしたい。

2 歌枕の意味

デジタル文学地図で様々な歌枕に触れていくと、歌枕とは何かということが、おぼろげながら見えてくる。だが、まず「歌枕」についての基本研究書である奥村恒哉の『歌枕』（平凡社、1977）が述べている「歌枕」の意味について確認しておこう。

奥村によれば、歌枕は「和歌にしばしば詠まれる名所という意味」である。そして「和歌を詠むにふさわしい、特定の由緒ある地名がある。その特定の一群の地名が歌枕と称される」。歌枕の範囲は、八代集、伊勢物語、源氏物語である。また歌枕が固定するのは宗祇『名所方角抄』の時期（15世紀後半）である。歌枕は作歌する人の多い山城・大和に最も多く、幹線道路に沿って多い。歌枕は他の地名と違って「文学上の地名」であり、読み継がれるうちに固有の情緒が付着し、固定する。

歌枕の範囲として八代集の他に伊勢物語と源氏物語が挙げられているが、伊勢物語や源氏物語は古来歌書として認識されていたものである（江戸時代の書籍目録でも「歌書」に分類されている）から、歌枕は和歌世界で形成されてきたものだと考えて差し支えないだろう。また宗祇の『名所方角抄』が歌枕の固定に関わるという点、宗祇は、どの程度が事実かはともかく「旅する連歌師」であり、歌語の管理も行っていた人物というべきであり、歌枕の固定に宗祇に関わるというのは、わかりやすい説明であろう。

さて、歌枕の形成を通史的に見ていくと、奥村のいう「文学上の地名」が文学遺跡化するケースが見られる。歌枕（名所）は本来ピンポイントで示せない。「歌人は居ながら名所を知る」（『毛吹草』など）という有名な言葉があるが、この言葉は歌枕が「場所」ではなく、「文学上の地名」であることを示している。つまり「場所のイメージ」である。物語や謡曲に見られる「道行」の景観描写は実景ではなく、イメージの描写なのである。それゆえ歌人たちは名所を「居ながら」にして知っている。

しかし、古典文学上のイメージとしての歌枕は文学遺跡化（ピンポイント化）し、歌枕探訪を招く。江戸時代には、名所記・名所図会などを通して、文学遺跡化はさかんに行われる。一九は「歌人は居ながら名所をしり、雅人は行て名所を探る」（『東海道中膝栗毛』五・序）と述べた。名所を探ったのは伝説上の西行・宗祇、それに倣った芭蕉であり、『撰津名所図会』を手に連日撰津の名所を探った大田南畝である。

「文学上の地名」のイメージには二つあるだろう。一つは可視化されるイメージである。名所絵は可視化されたイメージを描いている。たとえば「八橋」であれば燕子花、「龍田」であれば紅葉、「吉野」であれば桜が描かれるという類いである。一方、必ずしも可視化されないイメージもある。これは言葉の連想、物語の文脈などによるものである。たとえば、「宇治」から「憂し」、「生田」から「いくたび」、「八橋」から「物思い」や「恋」である。

『伊勢物語』九段に、

みかはの国、八はしといふ所にいたりぬ。（中略）その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五もじをくの上
にすへて、たびのこゝろをよめ」といひければ、よめる。からごろもきつつなれにし
妻しあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とあり、下線部の歌が「物思い」や「恋」のイメージを生んだ証歌となる。

3 『雨月物語』と歌枕

『雨月物語』はいわゆる前期読本の代表作である。半紙本五巻五冊。剪枝崎人（上田秋成）作。桂眉仙画。大坂・野村長兵衛、京都・梅村判兵衛版。自序によれば明和五年（1768）に脱稿し、安永五年（1776）に刊行された九篇からなる短編怪談集である。本短編集は登場人物が旅をする話が多く、一種の廻国譚集成として捉えられる。巻頭の「白峯」は後述するように西行廻国譚である。また、さまざまな国のはなしが集められているという点では「諸国ばなし」的である。そして、そこには、歌枕が多く出てくることから、和歌を挟む歌物語として読める篇もある。また『雨月物語』の原型ではないかと注目されてきた『世間妾形気』刊行予告に載る二冊は、「諸国廻船便」と「西行はなし歌枕染風呂敷」というものである²。その題名から「廻国譚」的、「歌物語」的であることがうかがわれる。

そのように見てくると、デジタル文学地図が、『雨月物語』の研究や教育（『雨月物語』は高等学校の古文の教科書にも採用されることがある）に活用できるかもしれないと思われる。

次に実際に各篇に現れる登場人物が、どの場所からどの場所へ移動するかを見てみると、次のようになる。

「白峯」 近江（逢坂）→・・・（諸国・諸地）・・・→讃岐（真尾坂）
「菊花の約」 播磨（加古）→出雲（富田）
「浅茅が宿」 下総（真間）→京→近江（武佐）→下総（真間）
「夢応の鯉魚」 近江（三井寺・琵琶湖周遊）
「仏法僧」 伊勢（相可）→京→大和（吉野）→大和（高野山）
「吉備津の釜」 備前（庭妹）→播磨（印南）
「蛇性の姪」 紀伊（三輪が崎・新宮）→大和（石橋市）→大和（吉野）→紀伊（道成寺）
「青頭巾」 美濃（竜泰寺）→奥羽→下野（富田）→奥州→下野
「貧福論」 陸奥（会津）

ここから、「諸国ばなし」「廻国譚」としての『雨月物語』の一面が浮かび上がってくるだろう。さて「諸国ばなし」的側面を考えるあたり、『西鶴諸国はなし』の序文（とっていいかどうかは微妙なのだが）を検討してみよう。

² 高田衛「「白峯」の成立と雨月物語の原型—「西行はなし歌枕染風呂敷」をめぐる—」（『近世文藝』第4号、1957）。

世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ。

熊野の奥には湯の中にひれふる魚有。筑前の国にはひとつをさし荷ひの大蕪有。豊後の大竹は手桶となり、わかさの国に弍百余歳のしろびくにのすめり。近江の国堅田に七尺五寸の大女あり。丹波に一丈弍尺のから鮭の宮あり。松前に百間つづきの若和布有。阿波の鳴戸に童女のかげ硯あり。加賀のしら山にゑんまわうの巾着もあり。信濃の寢覚の床に浦嶋が火うち管あり。かまくらに頼朝のこづかひ帳有。

都の嵯峨に四十一迄大振袖の女あり。これをおもふに人はばけもの、世にない物はなし。

「諸国ばなし」の「諸国」は「都」と対置されていることがうかがわれるだろう。「諸国」は異界であり、都が中心、言い換えれば、諸国には異様なモノがいて、都には人がいるという構図なのだが、その都でも、郊外である嵯峨には、異様な人がある。ここで諸国の異様なモノ以上に、都（近く）の人こそが化け物だという逆説が成立しているのが面白いのである。

さて、『雨月物語』に戻る。ここでは第一話「白峯」の冒頭を、歌枕に注目して検討してみよう。

あふ坂の関守にゆるされてより、秋こし山の黄葉見過ごしがたく、浜千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不尽の高嶺の煙、浮島がはら、清見が関、大磯小いその浦々、むらさき艶ふ武蔵野の原、塩竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蟹が苦や、佐野の舟梁、木曾の棧橋、心のとどまらぬかたぞなきに、猶西の国の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葭がちる難波を経て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつも、行々讃岐の真尾坂の林といふにしばらく筍を植む。草枕はるけき旅路の労にもあらで、観念修行の便せし庵なりけり。

早く指摘があるように、冒頭のこの場面の典拠は、慶安三年版『撰集抄』である³。

こしの白山雪積りて、老曾の森のはゞきゞ、風になびきやすく、佐野の野原の、ほやのすゞきそよめきて、同心の末葉の露は、風に乱てしどろなる有様、木曾の懸橋、佐野の舟橋など見侍りしに、心もとゞまる程なり。逢坂の関のせき守とめかねし、秋こし山のうす紅花、み過しがたく、浜千鳥の、跡ふみつくるなるみがた、富士の山辺は時しらぬ、かのこまだらの雪のころ、浮嶋が原、清見が関、大磯小いその浦々は、過がたく侍るぞや。 参考 若木 1980

下線部を比べれば「白峯」の道行文が『撰集抄』の西行の道行文に倣ったことは明らかである。また、稲田篤信は、「白峯」の冒頭が紀行文に似ているとして、宗祇『筑紫道記』の序を挙げる⁴。

二毛のむかしより六十の今にいたるまで、をろかなる心一すぢにひかれ、入江のよしあしにまよひ、身をうき草のうきしづむなげきたえずして、うつりゆく夢うつゝの中にも、時にしたがふ春秋のあはれおもひすてがたく侍るまゝに、国々に名ある

³ 若木太一 「〈白峯〉の造型-典拠からの淵源」（『近世文藝』32、1980年）。

⁴ 稲田篤信 「『筑紫道記』と『雨月物語』」（『文学』隔月刊10-1）2009年）。

所見えまほしく侍るほどに、つくば山もおもひ入るさはりなく、白川の関の越がたきさかひをも見侍りしかば、いまに松浦・箱崎のあらましのみふかう侍りながら、ちかき世となりて、芦原の嵐のさはぎしきりて、都のうちも波のをとたえず侍れば、草のいほりいとゞすみがたく侍るを、おもはざるに、左京兆のかぐはしきちぎりふかうして、西の国の磯の上までをたのめおき給へることありき。ほどもなく博多の海も浪をさまりて、岩国山いとうごきなきかくれがとなりぬれば、文明十二の六月はじめ、周防国山口といふにくだりぬ。

旅のルートは全く異なるが、誰が旅の主体であるかが文章からはわからないこと、過去の旅を回顧し、まだ見ぬ境に憧れて旅を続けるという構成を、秋成は『筑紫道記』から倣ったのではないかと稲田は指摘する。首肯すべき見解だろう。

しかしながら、典拠をふまえ、紀行文に倣いつつも、「逢坂の関守にゆるされてより」と、いきなり歌枕から語り始めるのは、『雨月物語』「白峯」独自である。「デジタル文学地図」を援用して、その意味について考えることができないだろうか。というより、「デジタル文学地図」を意識することで、この問題が浮上してくると言うべきか。

「デジタル文学地図」には「歌枕の意味」として「逢坂関、逢坂山」を載せ、「歌枕としての特徴」として「畿内と東国との境界となる関所」と説明する。「連想」としては、「夕附鳥（木綿附鳥）、関の杉村、さねかづら、駒むかへ、旅人、関の明神、琴の音、走り井、蟬丸、別、近江、往来、関の清水、逢ふ」を挙げている。『雨月物語』のような読本の読者には、知識人と一般庶民の二層（雅俗）があるとされている⁵。知識人読者にとって、歌枕逢坂のイメージは「畿内と当国との境界となる関所」であることを含め、共有されている。

デジタル文学地図の和歌データベースを確認すると、この歌枕の特徴を踏まえた和歌が並ぶ中、次のような歌たちが浮上してくる。

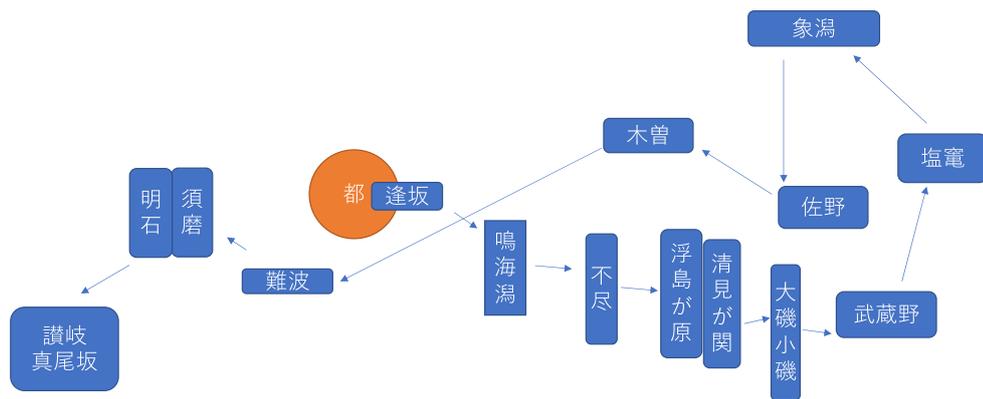
これやこの行くも帰るも別れつつ知るも知らぬも逢坂の関（後撰 雑一、蟬丸）

逢坂の嵐のかぜはさむけれど行ゑしらねば 侘つつぞぬる（古今 18 雑下 詠み人しらず）

あふ坂の関のあなたもまだみねば東のこともしられざりけり（後拾遺 雑二 大江匡衡）

下線部に着目すると、「逢坂」が、まだ見ぬ未知の世界、すなわち都を起点とした異界への入口であることが明らかになる。物語は冒頭から「逢坂」を越えて「異界」を廻るのである。白峯の冒頭の歌枕を連ねた道行きはそのことを示している。都を出た西行の異界廻りである（次図）。

⁵ 中村幸彦「読本の読者」（『中村幸彦著述集』第五巻「近世小説様式史考」）（中央公論社、1982年）。



4 「逢う（逢えない）」物語としての『雨月物語』

しかし、それだけにとどまらない。「逢坂」から始まる物語という見立ては、『雨月物語』全体に及ぶという見方も可能なのである。「デジタル文学地図」は「逢坂」からの連想として「逢う」を挙げる。用例の和歌として、次のようなものがある。

ゆく末の命も知らぬ別れちは今日逢坂や限りなるらん（拾遺 卷六別 大中臣能宣）

思ひやる心は常にかよへども逢坂の関越えずもあるかな（後撰 卷九恋一 三統公忠）

逢坂の関とめらるる我ならばあふみてふらんかたも知られず（後撰 卷十二恋四 春澄善縄女）

あらためて考えれば、「逢坂」からはじまる『雨月物語』は「逢う」あるいは「逢えない」話を集めた物語集であることに気づく。次の通りである。

「白峯」	西行が、崇徳院の霊に逢う。
「菊花の約」	丈部左門が、宗右衛門の霊に逢う。
「浅茅が宿」	勝四郎が、妻宮木の霊に逢う。
「夢応の鯉魚」	僧興義が、夢で海神の使者と逢い、鯉に化身する。
「仏法僧」	夢然親子が、豊臣秀次一行の霊に逢う。
「吉備津の釜」	正太郎が、妻磯良の霊に逢う。
「蛇性の姪」	豊雄が、蛇の化身である真女子に逢う。
「青頭巾」	快庵禅師が、院主に逢う。
「貧福論」	岡左内が、夢で黄金の精霊に逢う。

とりわけ「浅茅が宿」は、「逢坂」という地名が物語の中で極めて重要な意味をもつ一篇である。そのあらすじをまず挙げる。

下総の真間に住む勝四郎は土地に古い豊かな百姓であったが、仕事を嫌って家は没落する。勝四郎は家運挽回のため京から来ていた知人の絹商人に同行し、妻の宮木を残し都へ商いに上る。宮木は心細かったが、この秋には戻るとの夫のことばを信じて送り出す。まもなく真間は戦場となり、宮木は秋になっても戻らない夫の帰りをひたすら待ちわび、歌を詠む。京で利を得、故郷が戦場となったと聞いた勝四郎は急ぎ八月に京を立つが、木曾で山賊に襲われ、その先には関ができて通れ

ないという噂を聞き、都に引き返す。その途中熱病にかかり、近江で過ごす。七年後、勝四郎は帰郷、真間に着いた勝四郎の見た故郷は荒れ果てていたが、家も変わらず、宮木はこの間のつらさを切々と勝四郎に訴える。翌朝目覚めた勝四郎は宮木が亡霊だったと知る。

都と東国下総に夫婦が引き裂かれ、その間に象徴的に逢坂がある。

秋になれば帰ってくるという夫勝四郎の言葉を信じ、戦火の中で妻宮木は待ち続ける。しかし、「秋にもなりしかど風の便りもあらねば」「恨みかなしみおもひくづをれて」歌を詠む。その歌に「逢坂」が詠み込まれるのである。

身のうさは人しも告じあふ坂の夕づけ鳥よ秋もくれぬと

宮木の詠んだこの歌において、逢坂は都と東国（の下総）を隔てる関として現れる。「夕づけ鳥」は、「逢坂」からの連想される言葉としてデジタル文学地図に登載されていた。用例に挙がっている『古今和歌集』の次の歌が有名である。

逢坂のゆふつけ鳥も我ごとく人や恋しきねのみ鳴らん（古今卷十一恋一 読み人知らず）

この歌は、従来宮木の詠んだ歌の出典として指摘されていた。このイメージを踏まえて、謡曲「蝉丸」にも「ともに御名を木綿付（ゆふつけ）の、鳥も音をなく逢坂の、せきあへぬ御なみだ」という一節がある。

さて、かつて指摘したように⁶、実際の典拠は、正保四年刊の『歌仙歌集』『柿本集』所収の次の歌だろう。

春きぬと人しも告げず逢坂のゆふつけ鳥の声にこそ知れ

なぜこれが典拠と考えられるかというと、「人しも告げず」が非常に珍しい表現であり、他に用例を見出せないからである。これが認められるとすると、もうひとつの問題が浮上する。「柿本集」ではこの歌が「国歌」に出てくる「しもつけ」を隠題とする和歌だということである。「人しも告げず」に「しもつけ」が詠み込まれているのである。だとすれば、宮木の詠んだ歌にもそれが仕込まれているはずであり、のみならず、

身のうさは人しも告じあふ坂の夕づけ鳥よ秋もくれぬと

典拠との関係でいけば、オリジナルな部分である「身のうさは」にも「美濃」が掛けられている可能性は否定できない。事実「浅茅が宿」のこのあとの展開で、世はますます騒然とし、人心は荒み、宮木は貞操の危機に身をさらされる。夫が帰ってくるはずの秋は暮れ、翌年になる。

「あまさへ去年の秋（宮木が歌を詠んだ秋）、京家の下知として、美濃の国郡上の主、東の下野守常縁に御旗を給びて、下野（史実では下総）の領所にくだり」と叙述される。戦乱はより厳しくなる。宮木はこの戦火の拡大により死に至る。夫を想う宮木の歌の中に凶らずも組み込まれた「美濃」「下野」が呪言的に機能し、二人を引き裂いたと詠めるのである。ここでは「あふ坂」が、二人の断絶性を象徴し、「恋しくとも逢えない物語」を紡いだのである。

⁶ 「隠された地名-「浅茅が宿」作中歌補注」（『秋成考』翰林書房、2005年）。

デジタル文学地図の地図とデータは、それだけで論文が書けるわけではないが、研究の発想をうながし、論文執筆時のヒントを提供する研究支援ツールとして、使える。その一例として『雨月物語』と歌枕を考えてみた次第である。研究支援ツールとしての有効性を高めるために、一層のデータの充実や利便性の向上をめざしたい。

文献目録

- IKURA, Yōichi 飯倉洋一 (2005): *Akinari kō* 秋成考. Tōkyō: Kanrin shobō.
- INADA, Atsunobu 稲田篤信 (2009): “ ‘Tsukushi michi no ki’ to ‘Ugetsu monogatari’ 『筑紫道記』と『雨月物語』”. In: *Bungaku* 文学. Vol. 10 (1): 68–76.
- NAKAMURA, Yukihiro 中村幸彦 (1982): “Tokuhon no dokusha 読本の読者”. In: NAKAMURA, Yukihiro 中村幸彦: *Nakamura chojutsu shū, dai-go-kan ‘Kinsei shōsetsu yōshiki shikō’* 中村幸彦著述集 第五巻「近世小説様式史考」. Tōkyō: Chūō kōron sha: 441–458.
- TAKADA, Mamoru 高田衛 (1957): “ ‘Shiramine’ no seiritsu to Ugetsu monogatari no genkei – ‘Saigyō hanashi utamakura someburoshiki’ o megutte 「白峯」の成立と雨月物語の原型—「西行はなし歌枕染風呂敷」をめぐって—”. In: *Kinsei bungei* 近世文藝. Vol. 4: 52–61.
- WAKAKI, Taiichi 若木太一 (1980): “ ‘Shiramine’ no zōkei – tenkyo kara no engen 〈白峯〉の造型—典拠からの淵源—. In: *Kinsei bungei* 近世文藝. Vol. 32: 59–83.